

パラグアイ大統領選挙について

石田 直裕

さる4月22日（日）、パラグアイ大統領選挙が実施され、与党コロラド党候補のマリオ・アブド・ベニテス元上院議員が全国刷新大同盟候補のエフライン・アレグレ リベラル党党首を破って当選を果たした。本稿では、大統領選挙の概要を報告するとともに、あわせて行われた上院・下院議員選挙並びに17県知事選挙の結果についても、簡単に紹介したい。



本使のアブド・ベニテス次期大統領表敬。左から：ベラスケス次期副大統領、本使、アブド・ベニテス次期大統領、カスティグリオール二次期外相
出所：在パラグアイ日本国大使館

大統領予備選挙

パラグアイでは法の規定により、大統領選挙の前に各党から出馬する候補を決定するための一斉党内予備選挙が行われることになっている。今回は昨年12月17日（日）に行われたが、コロラド党予備選挙では、アブド・ベニテス氏が、カルテス大統領が推すペニャ前財務相を得票率で7ポイント上回って勝利した。

事前の予想では、いわば反主流派のアブド・ベニテス氏と主流派のペニャ氏とは、ほぼ互角の戦いと思われていたが、結果的に8万票以上の差をつけてアブド・ベニテス氏が当選した。両者の選挙公約には、ほとんど違いがなかったが、アブド・ベニテス氏が、現職のカルテス大統領が強力に応援していたペニャ氏に勝利できた理由として、①ペニャ氏が1年前にリベラル党からコロラド党に鞍替えしたばかりで党

内基盤が弱かった、②カルテス大統領はテクノクラートを大臣に重用しており（ペニャ氏もそのひとり）、守旧派の政治指導者からの反感があったなどが指摘されている。

一方、コロラド党と並ぶ2大政党の一つリベラル党の予備選挙では、現党首であるエフライン・アレグレ元公共事業相とマテオ・バルメリ元上院議員が出馬したが、アレグレ氏が60%以上の票を獲得し圧勝した。リベラル党は、本番の大統領選挙では左派連合（ルゴ元大統領の支持基盤となった左派政党・運動の連合組織）と選挙協力をすることを決定して、アレグレ氏は左派連合の擁立したルビン副大統領候補と組んで大統領選挙を戦うこととなった。したがって、アレグレ氏とルビン氏は、「全国刷新大同盟」の大統領候補と副大統領候補として選挙戦を戦うこととなった。

大統領選挙

本番の大統領選挙の選挙運動は、正式には2月19日（月）からスタートしたが、最終的には、すでに述べたコロラド党のアブド・ベニテス候補、全国刷新大同盟のアレグレ候補の他に、拡大戦線党、パラグアイ緑の党など8党からの候補者も立候補したため、合わせて10人で戦われることとなった。アブド・ベニテス候補、アレグレ候補とも、経済対策、インフラ整備、社会保障、保健、教育、司法、環境、治安など多分野にわたる選挙公約を発表したが、両候補による討論会は1回開催されただけで、しかも候補者相互の質問の応酬は行われなかったため、公約について双方による突っ込んだ議論はなされなかった。公約の中では、両候補とも憲法改正による司法制度改革を打ち出したことが注目される他、アブド・ベニテス候補は教育予算を5年後にGDPの7%まで拡大する、アレグレ候補は電気料金を半分にするとという具体的な提案がなされたことが特筆される。

選挙運動は、EU選挙監視団、米州機構選挙監視団などの310名の監視者の見守るなか、比較的平穏に行われた。

大統領選挙の事前の新聞3社の予測では、ラ・ナシオン紙（3月27日発表）

アブド・ベニテス候補（コロラド党） 54.9%
アレグレ候補（全国刷新大同盟） 30.5%

ABC紙（4月6日発表）

アブド・ベニテス候補（コロラド党） 54.9%
アレグレ候補（全国刷新大同盟） 28.6%

ウルティマ・オラ紙（4月11日発表）

アブド・ベニテス候補（コロラド党） 55.7%
アレグレ候補（全国刷新大同盟） 31.4%

であり、3紙ともアブド・ベニテス候補の大差での勝利を予想していた。

選挙運動は4月20日（金）をもって終了し、4月22日（日）朝7時から夕方4時まで、全国の1,115か所の投票所で投票が行われた。暫定結果発表のための票集計作業は同日6時ごろから始まり、パラグアイ選挙裁判所は、21時に96%の開票が終わったところで、大統領選挙はアブト・ベニテス候補の勝利であると発表した。これを受けて、アブト・ベニテス候補は、21時40分から勝利宣言を行ったが、このなかで、特にコロラド党、リベラル党で国民が2つに分裂したことに言及し、国民の融和を強く訴えた。

最終的な選挙結果は次のとおりである。

有権者総数 4,242,505
投票総数 2,595,465（投票率 61.4%）
アブド・ベニテス候補（コロラド党）
1,205,310（得票率 46.44%）
アレグレ候補（全国刷新大同盟）
1,109,309（得票率 42.74%）
イバニエス候補（パラグアイ緑の党）
84,601（得票率 3.26%）

（他の7党の候補者の合計投票率2.39%、このほかに無効票、白紙が5.17%ある）

この選挙結果について、リベラル党支持者を中心として、選挙裁判所に抗議する運動が24日夕方から始まり、国家警察は選挙裁判所前の道路の通行を規制した。同抗議集会は翌25日午後には沈静化し、通行規制は29日に一部、その翌日には完全に解除された。

4月22日の選挙では、大統領・副大統領のほか、上院議員、下院議員、県知事、県議会議員及びメルコスール議員の選挙も行われた。

上院議員は、コロラド党が現有議席より2議席減



4月23日付け当地主要3紙トップページ。左から：ラ・ナシオン紙、ABC紙、ウルティマオラ紙 出所：在パラグアイ日本国大使館

らし、リベラル党は現状維持で、下院議員は、コロラド党が4議席減、リベラル党が2議席増となった。当初の予想ではリベラル党が大きく議席を減らすとも予想されたが、結果的には、両党で上下両院の過半数以上を占める2大政党制が維持された。

また知事選挙では17県知事のうち、13県がコロラド党、3県がリベラル党、1県が全国刷新大同盟であったが、コロラド党は前回より1県多く獲得し、特に最も有権者数の多いセントラル県を初めてコロラド党が獲得したことが注目される。

選挙結果の分析

アブド・ベニテス候補が事前の予想以上に票を獲得できなかったが、これは以下の理由によると思われる。まずは、日本でも見られることだが、アブド・ベニテス候補が事前に圧倒的に優勢と伝えられたため、コロラド党支持者が投票に行かなかったことが考えられる。このことは、投票率が5年前の大統領選挙の68.5%から今回61.5%と7ポイントも下回っていることから推測される。一方、アレグレ候補は、前回も大統領選挙に出馬しているが、前回の得票率を5ポイント以上伸ばしており、リベラル党と左派連合の選挙同盟が予想以上に機能したと考えられる。さらに、今回第3位となった候補者は全体の3.26%しか獲得しておらず、前回の選挙では第3位の候補者が5.6%、第4位の候補者でも3.2%獲得したことから考えると、アレグレ候補以外に有力な候補者がおらず、反コロラド党の票がアレグレ候補に集中したとも考えられる。また、アレグレ候補の電気料金を半額とするなどの大衆迎合的な政策も浮動票取り込みに役だったとも考えられる。

以上の通り、選挙ではアレグレ候補は善戦したといえ

るが、既に2回の大統領選挙での敗北であり、彼の党内での影響力は弱まっていくという見方も出ている。

一方、当選したアブド・ベニテス候補も、小差での勝利であり、議会の選挙でも、コロラド党は、上院議員は2議席減、下院議員も4議席減となっており、議会対策で手腕を発揮する必要がある。

今後のパラグアイの政策動向

今後8月15日にアブド・ベニテス氏は正式に大統領に就任する。同氏はアスンシオン生まれの46才、若い頃から会社経営に携わり、2005年にコロラド党に入党、2013年上院議員に当選し、コロラド党副党首となり、2015年には上院議長に就任。同年にコロラド党党首選に立候補するも、カルテス大統領の支援する現コロラド党党首アリアナ氏（現下院議長）に破れ、以後コロラド党内の反主流派となった。既に述べたとおり、予備選挙で、カルテス大統領が推すベニャ前財務相を破ったが、選挙後、党内の融和に努め、カルテス大統領の支援も得て、今回の大統領選挙を戦った。10年前の大統領選挙では、コロラド党が予備選挙での戦い後の党内融和ができず、野党候補に本番の選挙で負けるという失敗があり、今回はなんとか党内融和が図れたことが、最大の勝因ともいえる。

アブト・ベニテス次期大統領は、父親がストロエスネル大統領（1954～89年在職）の秘書官であっ

た関係で何度も日本大使公邸を訪れており、留学していたアメリカの大学が帝京大学と提携していたこともあって、日本や皇室にも詳しく、日本酒、サッポロビール、サントリーのウイスキーも飲むことがあるという。副大統領に当選したベラスケス氏は50歳、下院議員で生粋のコロラド党員である。また、次期外相に指名されているカスティグリオニ上院議員は、建築工学が専門であるが、2003～07年に副大統領（ドゥアルテ政権）を務めるなど有力政治家で、また、パラグアイ政府要人のなかでも随一の親日家を通っている。家では、浴衣を着ているという。

今後のパラグアイ政府の政策は、基本的な方向性は変わらないと思われる。現カルテス政権は、2013年に「パラグアイ国家開発計画2030」を発表し、これに基づき「機会の均等」、「透明で効率的な公的手続き」、「国土開発・整備」、「環境持続性」を柱として、貧困削減、社会開発、包括的経済成長、国際社会における地位確立に取り組んでいる。アブド・ベニテス政権も、この計画をベースに自身の選挙公約を盛り込んで新しい計画を打ち出していくと思われる。既に弁護士で元官房長官のビジャマジョール氏をヘッドとする政権移行チームが6月4日から正式に活動を開始しており、移行チームの今後の動向が注目される。

（いしだ なおひろ 在パラグアイ日本国大使）

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジル映画史講義』

今福 龍太、金子 遊編集 現代企画室
2018年5月 450頁 2,800円+税 ISBN978-4-7738-1803-1

2000年以降サンパウロ大学等の客員教授を務めたこともある文化人類学者が、大学や一般人向けに行った一連のブラジル映画史と作品紹介の講座の記録を文字化したもの。1930年代の黎明期から、1960年代半ばのイタリアのネオリアリズム、フランスのヌーヴェルヴァーグの影響を受けたシネマ・ヌーヴォ運動、1964年からの軍政時代には抑圧と高度経済成長によって変容しながらも数々の優れた作品を生み、1985年の民政移管後に国際的にも評価された映画を輩出するようになったブラジル映画について、その精神性、ブラジルの歴史・風土・文化を、1959年のカンヌ映画祭最高賞を受けたフランス人のマルセル・カミュ監督の『黒いオルフェ』から説き起こし、1937年の初のトーキーから1984年の間に制作された12本の映画を取り上げ、粗筋、見所とその映画の意義、時代背景などを解説し、著者の考えを縦横に語っている。

著者は真のブラジル映画は、ブラジル文化の新たなビジョンを提示した1980年代末で終わっているが、それは近年の『セントラル・ステーション』や『シティ・オブ・ゴッド』など日本でもヒットした新しい映画について、世界的な映画市場を意識して容易に英語題名に変換される映画はもはやブラジルの主題から外れたアイデンティティを失った別物だからだとしている。

（桜井 敏浩）